巻頭言

このたび、何年かのブランクを経て、臨床教育学コース紀要『臨床教育人間学』第 14 号を発刊する運びとなりました。この間、臨床教育学コース（旧：臨床教育学講座）では、新たに Jeremy Rappleye 先生を准教授としてお迎えしました。また大学院生も大きく世代交代しました。教員の近況としては、矢野智司教授が、同氏の教育思想の主著というべき『贈与と交換の教育学—漱石、賢治と純粋贈与のレッスン』（東京大学出版会、2008 年）から、この 10 年の間に考えてきたことをまとめた『歓待と戦争の教育学—国民教育と世界市民の形成』（東京大学出版会、2019 年）を出版しました。西平直教授は、『ライフサイクルの哲学』（東京大学出版会、2019 年）、『稽古の思想』（春秋社、2019 年）を出版するとともに、毎年ブータンを訪ねフィールド調査を継続しています（写真は標高 4000m の崖に立つ尼僧院。午後の「お勤め（読経）」は 3-4 時間続きます）。

Jeremy Rappleye 准教授は、近著論文 “‘Better Policies for Better Lives?’: constructive critique of the OECD's (mis)measure of student well-being’ (Journal of Education Policy, 2019) を文化心理学者、Hazel Markus (Stanford University) 、内田由紀子（京都大学）両氏との共同研究で出版し、臨床教育学を社会学、心理学などとの学際的視点から活性化する研究を行っています。齋藤は、Paul Standish 教授との共編著 *Stanley Cavell and Philosophy as Translation: The Truth is Translated* (Rowman and Littlefield, 2017) および『〈翻訳〉のさなかにある社会正義』（東京大学出版会、2018 年）を出版し、「翻訳としての哲学」および「他なるものとの共存に向けた政治教育」の国際プロジェクトを推進しています。

本誌には、コースの大学院生や若手研究者の日本語、英語の論文が掲載されていると同時に、2018 年 12 月にロンドンで開講されたユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所 (IoE) との国際合同授業の成果発表として、京都大学と IoE の学生たちの論文が掲載されています。

この知的対話の場が、臨床教育学コースのさらなる活性化につながることを願っています。

2019 年 7 月 3 日
齋藤直子